

遠藤周作『沈黙』と「コンチリサン（痛悔）」  
 —〈神の沈黙〉と〈人間の沈黙〉—

尾西 康 充

はじめに

〈純文学書下ろし特別作品〉として一九六六年三月に新潮社から刊行された『沈黙』は、イエズス会士の「クリストヴァン・フェレイラ神父」が「教会を裏切る」——長崎で「穴吊り」の拷問を受けて棄教した——というエピソードからはじまる。江戸幕府は一六一三年（慶長一八）に全国的な禁教令を發布し、翌年に司祭や修道士を海外追放することにしたが、フェレイラは嚴重な追放令にもかかわらず警吏の眼を逃れて日本に残った。「三十七名の司祭」のうちの一人であった。一六三五年にローマでアントニオ・ルビノを含む四名の司祭は、「フェレイラの棄教という教会の不名誉を雪辱」するために「どんなことがあっても迫害下の日本にたどりつき、潜伏布教を行う計画」をたてた。実際五名の司祭と四名の従者が日本に密航するが潜伏中に発覚し、フェレイラによる棄教の説得に応じず、穴吊をはじめとする過酷な拷問の末一六四三年三月二二日ルビノが殉教し、その後他の全員が殉教したという歴史的背景がある。

一方、フェレイラの母国ポルトガルの聖職者にとって、彼が「異教徒の前に犬のように屈従した」とはとても信じられず、セバスチャン・ロドリゴを含む三名の若い司祭は「事の真相をこの眼でつきとめようとした」。実際一六四三年六月二七日筑前梶目大島で四名のポルトガル人司

祭、一名の日本人修道士、同宿四名が捕縛された。しかしルビノたちとは異なって司祭全員が棄教し、日本人妻と結婚して江戸小石川小日向にある切支丹屋敷で生きながらえたとされる。彼らのうちの一人ジュゼッペ・キャラがロドリゴのモデルであった。以下、『沈黙』のあらすじを追い、「コンチサン」の「サカラメント」（告悔の秘蹟）から「コンチリサン」（痛悔）へと信仰のあり方を変えながら隠れキリシタンが生き延びた系譜のなかに、「転びバテレン」であるロドリゴの生涯を位置づけてみようと思う。なお今日一般的には「告解」「秘蹟」と表記されるが、本稿では遠藤のテキストを尊重して「告悔」「秘蹟」と表記することにする。

一、日本への密航

一六三九年五月一日にイエズス会東インド管区の拠点澳門に到着したロドリゴは、巡察師ヴァリニャーノに日本への渡航について相談すると、日本における布教はもはや絶望的で、これ以上危険な方法で宣教師を送ることを澳門の布教会では考えていないと厳しい注意を受けた。ヴァリニャーノには実在のモデル、アレックスサンドロ・ヴァリニャーノ（一五三九年二月一日—一六〇六年一月二〇日）がいるのだが、ロドリゴが

澳門を訪れたときにはすでに死去しており、彼から日本への渡航を戒められたというのは小説上のフィクションである。ポルトガルの修道院でフェレイラから神学を教えてもらったロドリゴにとって、フェレイラの棄教は信じがたいことで、自分の眼でそれをたしかめたいと考えていた。ロドリゴの熱意に負けたヴァリニャーノは日本への渡航を許可し、ロドリゴが密航船を探しはじめると、日本に帰りたがっているという「ヒゼン地方」出身の漁夫キチジローと出会う。「二十八か九歳ぐらい」のキチジローは「酔っているくせに狡そうな眼をした男」で、ロドリゴの同僚フランシス・ガルペが彼に信徒かどうかを尋ねると、急に黙り込んだ後「ヒゼンのクラサキ村で二十四人の信徒たちが藩主から水磔に処せられた光景」を話し出す。しかし「顔を歪めると、突然、口を噤んで」しまい、「まるで記憶の中からの怖ろしい思い出を追い払うように手をふ」った。ロドリゴたちは「水磔に処せられた二十数人の信徒のなかに彼の友人や知人がいたのかもしれない」と推測したのだが、単にその光景を目撃していたというのではなく、棄教することによって辛うじて刑を逃れたか、あるいは自分が生き延びるために彼らを密告したという可能性も考えられる。

熟練した二五名の中国人水夫を雇い入れ、白蟻に喰われた跡を補修したジャンク船に乗り込んだロドリゴ一行は、航海中に嵐に襲われる。「弱虫の卑怯さ」を性格に持つキチジローは、水夫を手伝うこともせず、真っ青になって吐きながら「ガラサ」（聖籠）や「サンタ・マリア」（聖母）という言葉を発した。ガルペは再び信徒であるかどうか尋ねるのだが、キチジローは強く首をふるだけであった。実際日本で布教活動をおこなった司教ルイス・セルケイラは日本人信徒に対して、「こんちりさん」（痛悔）を起こすための心得と、その「おらしょ」（祈り）を教える

ために、『こんちりさんのりやく』（一六〇三年〔慶長八〕）を執筆した。同書には「此そしやう（訴訟）の御とりつきにわ、御は、さんた丸やさまを頼み奉れば、御とりあわせをでうす様にもきこしめし入たまゑて、これをもつて、われに御かんげ（勘気）をゆるしたまへ」とある。そもそも聖書には、マリアは神への「とりつき」役を果たし、神の勘気に触れた人間を神にとりなすことができることとされているので（『ヨハネによる福音書』第二章第一〜二節・カナの婚礼におけるマリアのとりなし）、決して間違えた解釈とはいえないのだが、大目付・宗門改役井上筑後守政重が「日本のまずしい百姓信徒が、なによりもまず聖母を崇拜している」ことに着目したように、ロドリゴも「百姓たちが時には基督より聖母のほうを崇めているのを知って心配」するようになる。

日本上陸直後キチジローによって、ロドリゴとガルペは「トモギ」という「戸数は二百戸にも足りぬ」漁村に連れてこられる。一六三三年一〇月以来、司祭や修道士たちとの接触が断られたこの村では秘密の信徒組織（ミゼリコルディア）を結成し、「じいさま」や「とっさま」と呼ばれる司祭の代理を務める長老が洗礼の秘蹟をおこなったり、祈祷や教理を教えていたりしていた。ロドリゴは「暗い海に面した貧しい狭隘な土地で牛馬のように働き、牛馬のように死なねばならぬ」百姓の身の上を案じる一方、「基督は美しいものや善いもののために死んだのではない。美しいものや善いもののために死ぬことはやさしいのだが、みじめなものや腐敗したものたちのために死ぬのはむづかしい」と感じていた。このときロドリゴの脳裡には殉教する自分の姿が浮かんでいたと思われる。五島の「ファサワ村」から密かにやってきた二人の男は、ロドリゴとガルペに告悔の秘蹟を授けてくれるように依頼する。彼らはキチジローと同じ在所の者であるといい、キチジローが「一度ころんだ切支丹」で

あることを明かす。八年前、恨みを抱いた者によってキチジローと彼の兄妹は密告され、「役人が一寸、脅しただけで、もう棄教すると叫びだし」たキチジローは放免されたものの、兄妹は聖画を踏むことを拒絶して火刑に処せられた。火刑の日、「臆病者」のキチジローは刑場にやってくるが兄妹の殉教を見ることもなくすぐに立ち去ったという。彼らの「部落オオドマリ」では、役人の眼を逃れて村民全員が今もキリスト教を信じているというのだが、彼らは「一度ころんだ」キチジローを責めることもなく、キチジローが「切支丹」であることを断言した。しかしロドリゴが「フカザワ村」から帰ってみると、「トモギ村」では役人による搜索がおこなわれていた。

カトリック教会法によれば、司教と司祭のみが告悔の秘蹟における義務者で、悔悛者の告解に対して罪の赦しを与えたり、適切に助言したりすることができるとされる。ロドリゴはキチジローに対して告悔をすすめ、「人の前にて我を言いあらわす者は、我も亦、天にいます我が父の前にて言い顕わさん。されど人の前にて我を否む者は我も亦、天にいます我が父の前にて否まん」〔『マタイによる福音書』第一〇章第三二―三三節〕という言葉について考えるように命じた。キリシタン版の教理問答『どちりなきりしたん』にも「御主ゼス キリシトの御をしへを心中よりヒイデスに受るのみならず、こと葉と、身もちをもてあらはす人なり」とある。浅見雅一氏によれば、イエズス会日本準管区長ペドロ・ゴメスは「一般信徒に対しては、迫害時に正直に答えたならば自分の身に危険が及ぶことが予想されるような場合は、信仰を隠したり、否定したりしても構わない」とし〔、〕、「迫害時に信仰告白を回避したり、信仰を否定したりしたとしても、事後に告解をすれば赦される」と考えていたという〔。〕。「トモギ村」が搜索を受け、長崎奉行所に村民三名を出頭

させなければならなくなったとき、踏絵を踏むことを命じられたらどうするかをモキチが尋ねると、ロドリゴは啾唳に「踏んでもいい、踏んでもいい」と叫び、傍にいたガルベは咄めるようにロドリゴをみる。モキチとイチゾウ、キチジローは踏絵に足をかけるのだが、役人の奇計によってモキチとイチゾウは信徒であることがばれてしまい、「トモギ村」の海岸で水磔に処せられる。長崎に送致された朝、キチジローは俯いて「なんのために、こげん苦しみはデウスさまはおらになさつとやるか」と呟いた。ロドリゴは「主はなんのために、これらみじめな百姓たちに、この日本人たちに迫害や拷問という試練をお与えになるのか」、いやキチジローが本当にいいたいのは「もっと別の怖ろしいこと」——「神の沈黙」——であった。

迫害が起って今日まで二十年、この日本の黒い土地に多くの信徒の呻きがみち、司祭の赤い血が流れ、教会の塔が崩れていくのに、神は自分にささげられた余りにもむごい犠牲を前にして、なぜ黙っていられる。キチジローの愚痴にはその問いがふくまれていたような気が私にはしてならない。

二名が刑死した後、彼らの遺灰がまかれた静かな海を眺めながら、ロドリゴは「神の沈黙」を感じざるを得ず、聖人伝に描かれたような「赫かしい殉教」ではなく、眼の前でおこなわれた百姓の死は「こんなにみじめで、こんなに辛いものだった」ことを痛感させられる。浅見氏によれば、殉教は「敬神の最高の表現形態」で、「キリシタン時代の日本における殉教は、古代ローマ帝国における殉教の再現」であるとされ、「禁合下の日本においては、日本人の一般信徒に対して殉教のための準

備教育がなされていた」という<sup>(3)</sup>。棄教して命拾いをしたキチジローは、「トモギ村」から脱出したロドリゴと五島の山中で偶然にも再会する。モチキやイチゾウのために告悔をするようにロドリゴから諭されたキチジローが祈禱をしている最中に、役人が現れてロドリゴが捕縛される。キチジローはロドリゴを密告したのであった。

## 二、牢獄に繋がれて

### ——「信心戻しの告悔（コンヒサン）」

捕縛されたロドリゴの前に、通辞役の男が現れる。神学校（セミナーオ）に通って洗礼も受けたが、修道士（イルマン）にもキリシタンにもなる志は持たなかったという。

「バードレたちは、いつも我々日本人を、馬鹿にしとられた。カブラルというバードレを知りましたが、あのお方は格別我々を蔑まれておられた。日本に來ながら、我々の家を嘲り、我々の言葉を嘲り、我々の食事や作法を嘲られておられた。そして私たちがセミナリオを出ても司祭となることを決して許されなんだ。」

通辞役の男の話を聞いたロドリゴは「カブラル師のことは、澳門のヴァリニャーノ師から聞いた記憶がある。彼の日本観のために、いかに多くの信徒が宣教師や、教会から離れていったかしれぬとヴァリニャーノ師は歎いていたのである」と回想する。実際フランシスコ・カブラルは一五七〇年に來日してから一五八一年までイエズス会日本布教長であったが、日本を視察したヴァリニャーノがカブラルの日本布教政策は誤りで

あると判断して、カブラルは辞任に追い込まれた<sup>(4)</sup>。高瀬弘一郎氏によれば、「人種的偏見」を抱いていたカブラルは「日本人ほど傲慢・貪欲・無節操かつ欺瞞に充ちた国民を見たことがない」とし、「日本人会員に学問を施したりする」と自分たちだけで結束し「ヨーロッパ人会員を追放し、自分たちが支配的立場につき、分裂をきたすおそれ」が一層強まると考えていたために、日本人のイエズス会入会と司祭叙品に反対していたという<sup>(5)</sup>。しかしこの小説のなかではロドリゴは、彼が否定しようとしているのは「バードレ・カブラルではなく、むしろ洗礼を一度でも受けたという自分の過去だろう」と思っていた。

この後ロドリゴは長崎の外町にある牢獄に護送されるが、キチジローは縋りつくようにロドリゴ一行の後を追う。牢獄のなかでロドリゴは、かつて顔見知りの「五、六人の男女」に告悔の秘蹟を授ける。役人の制止を振り切りながらロドリゴに近づいてきたキチジローが「一度転んだ者がもう一度、信仰に立ち戻る」ための「信心戻しの告悔（コンヒサン）」を希望し、「この俺は転び者だとも。だとして一昔前に生れあわせていたならば、善かあ切支丹としてハライソに参ったかも知れん。こげんに転び者よと信徒衆に蔑あはされずすんだでありますように。禁制の時に生まれあわせたばかりに……恨めしか。俺は恨めしか」という<sup>(6)</sup>。しかしロドリゴは「色あせて、襤褸のようになった人間と人生を棄てぬことが愛」であるとは感じるものの、キチジローを許すことができなかった。役人の取り調べに対して四名の囚人が踏絵を踏むことを拒否し、「片目の長吉」が斬首される。ロドリゴは井上筑後守の訊問を受けるが、なぜ次第に殉教の覚悟が弱まってくる。心のどこかで誰かが「ここの生活はお前にとって一番、たのしいからな」と囁きかけてくる。

そうだ。日本に来て以来、自分はこの牢舎以外の場所で司祭として義務を果たしたことはほとんどなかった。トモギでは、役人におびえかくれ、それ以後はキチジローのほか百姓たちと接触することはなかった。ここに来て始めて、彼は百姓たちと生活し、飢えることもなく、一日の大半を祈ったり黙想することができたのである。

「気のゆるみ」とロドリゴは表現したが、ロドリゴに対して拷問が加えられなかったのは、ロドリゴの「気のゆるみ」につけ込んで、彼を棄教させることによって布教会に対する信頼を失墜させようという心理的効果を狙ったものであったと推定される。尾原悟氏によれば「処刑の方法も時とともに残虐さを加え、キリシタンをただ抹殺することよりも転ばせること、民衆にもキリシタンへの恐怖と嫌悪を感じさせることがもくろまれた」<sup>70</sup>。キリシタン弾圧に際して「殉教は一五九七年に長崎で行なわれた二六聖人の処刑に始まるが、これは逆にキリシタンたちの信仰を高揚する結果になったので、江戸期に入ると、できるだけ死を長引かせ、苦しみを多く与えることによって転ばせるか、民衆に対して恐怖の見せしめにする処刑の方法へと変わっていき、最後には穴吊しにまで至った」のであったという<sup>71</sup>。

### 三、キリスト教に対する日本の「精神風土論」

役人は「踏絵がたんなる形式だと信徒たちに繰り返しかえし教えていた」とされ、三名の信徒は踏絵を踏むのだが、捕縛されていたガルペが棄教しなかったため、薦によって簀巻きにされて小舟から落とされて死に、ガルペも小舟を追って入水する。『沈黙』ではキリシタン迫害の象徴と

して踏絵が描かれているのだが、実のところ警吏たちは便宜的に踏絵を扱っているし、そもそも踏絵は同じキリスト教徒でも、聖体や聖母、聖人、遺物、聖像などに対する崇拜が偶像崇拜に当たると考えていたルター派には、敬意を払う価値のないものであるとされた。カトリック教会では、歴代の公会議によって、さらにはトリエント公会議第二五総会によって、聖像画はそこに描かれた図像を通してキリストを崇拜し、キリストに倣った諸聖人を崇敬するものとされ、偶像崇拜ではないと判断されていた<sup>72</sup>。神への信仰を持つ者ならだれもが踏絵を踏むことに躊躇を感じるのであるが、踏絵の悲劇は、カトリック教会に特徴的なきごとであったといえよう。

彼らの死に動揺を覚えたロドリゴは、やがて長崎の内町にある西勝寺でフェレイラと再会する。井上筑後守から沢野忠庵という日本名をもらったフェレイラによれば、日本人が信じているのはキリスト教の神ではない。なぜなら日本人は「人間とは全く隔絶した神を考える能力をもっていない」ために「人間を美化したり拡張したものを神とよぶ」からで、自分が「たずさえてきた苗はこの日本とよぶ沼地でいつの間にか根も腐っていた」という。ロドリゴにとって、フェレイラが唐突に語りはじめた「精神風土論」は、自己の棄教を正当化しようとするために牽強附会の説であるように感じられて、それを信じることができず、「基督教と教会とはすべての国と土地をこえて真実です」と反論する。そして「人は偽りの信仰で自分を犠牲にすることはできぬ筈だ。自分がこの眼で見た農民たち。まずしい殉教者たち。あの連中にももし救いというものがない信じられなければ、どうして霧雨のふる海の中にただ石ころのように沈んでいくことがきたらう」と考える。ロドリゴたちが日本に来たのは、フェレイラに立ちかえりを求め、もしそれができなかった場合には、

彼の背教の罪を自分の血で贖うためであった。いわばイエズス会の名譽にかけて、フェレイラの背教という不名譽を雪辱するためであったのだが、そのようなイエズス会士としての誇りは、さきに見たカブラルの「人種的偏見」と表裏一体のものになっていたケースがあったと思われる。高瀬弘一郎氏によれば、一六二二年八月五日に長崎で殉教する司祭カルロ・スピノラでさえ「この黒ん坊がラテン語その他の学習を始め、それを鼻にかけるようになったので、もうわれわれにとって彼等は役に立たない」とし、日本人は聖職者に不向きなので学問をさせて昇進の希望を持たせるようなことをしてはならないと考えていたという<sup>10)</sup>。

一方、フェレイラの「精神風土論」を考えるためには、イエズス会や托鉢修道会（ドミニコ会、フランシスコ会、アウグスチノ会）などのカトリック修道会からまったく切り離されながらも、明治初期に発見されるまでの二五〇年もの間一万人を超える数の信徒が潜伏していたという歴史的背景に眼を向ける必要があるだろう。彼らは明治政府によって信仰の自由が許されてもカトリック教会に復帰しなかった。尾原悟氏によれば、彼らが「仏教や神道、それに広く民間信仰や土俗慣行との独特な習合形態、シンクレティズムを固守」していることから「日本の土壌にしみこんで根付いたキリスト教の民間下降であり、日本のキリスト教土着化のあらわれ」ととらえる向きもあるが、「根本的なキリストの方向づけがそれぞれの人間性の問題として二五〇年間キリシタン信徒発見まで活きつづけたものこそ、日本に根づいたキリスト教思想と評価されるべきであろう」という<sup>11)</sup>。

ロドリゴは外町の牢舎を出て、長崎市中を引きまわされたうえで、奉行所の独房に入れられる。ここでもキチジローが尋ねて来、告悔の秘蹟を求めて、「パードレさま。許して下さい」、「俺は生まれつき弱か。心

の弱か者には、殉教<sup>マチチ</sup>さえできぬ。どうすればよか。ああ、なぜ、こげん世の中に俺は生れあわせたか」と悲鳴を上げる。遠くから聞こえてきた唸り声を駈だといい、ロドリゴは過酷な拷問を前にして「心のゆとり」を感じていたが、フェレイラからそれが「穴吊りにかけられた信徒たちの呻いている声だ」と知らされて驚愕する。フェレイラは「わしが軋んだのはな、いいか。聞きなさい。そのあとでここに入れられ耳にしたあの声に、神が何ひとつ、なさらなかったからだ。わしは必死で神に祈ったが、神は何もしなかったからだ」という。そして穴吊りにされていた五名のキリシタンが何度も棄教するといったにもかかわらず、フェレイラが棄教しない限りは彼らを助けるわけにはいかないと役人からいわれて棄教したことを明かす。それに対してロドリゴは「あの人たちは、地上の苦しみの代りに永遠の悦びをえるでしょう」というのだが、迫害に屈することなく殉教すべきものであることを信徒に説いた『マルチリヨノ勸メ』のなかでもこの考え方が強調されている。

糾明ト苦シミヲ恐ル間敷キ為ニ、御扶ケ手ノ御言ヲ聞ケ。相カマヘテ、色身ノ命ヲコロシテアニマヲコロス力ヲ不ル持人ヲ恐ルベカラス。只アニマ、色身毛ニ陰ヘルノ、火穴ニ抛チ玉フ御方ヲ恐レ奉レト宣フ也。真世界ニ有ル程ノ苦シミヲ一ツニ而、彼ノ果シ無キ陰ヘルノ、苦患ニ比ブルニ於イテハ、大海ノ一滴ニモ異ナラス。然レハ、御主ニ対シ奉リテ、ワツカ成ル苦シミヲ堪ヘ難ク思ハズ、袈ビテ陰ヘルノ、落チ、彼ノ終リ無キ苦シミヲハ何ト様ニ堪ユベキソヤ。

浅見雅一氏によれば、一六一四年（慶長一八）道寿如庵の殉教以後に執筆されたとされる『マルチリヨノ勸メ』は「日本の信者に説くべき殉

教理論が先に存在していたのではなく、日本の現状に沿うような殉教理論が後から形成されていったと推測」できるとされ、「迫害時に信仰告白を回避したり、信仰を否定したりしたとしても、事後に告解をすれば赦される」というゴメスの理論とは異なっており、「信仰の否定が悔悛の秘蹟における赦しの対象になっていない」という<sup>(9)</sup>。神が与えた試練だとして信徒に殉教を勧める『マルチリヨノ勸メ』には、迫害を前にしながら「なぜ神は沈黙しているのか」と感じたロドリゴと同じ疑問も記されている。

キリシタンノ中ニモ、人ニ依ツテ思フニハ、キリシタンヲ責メ亡ボサントスル人々ノ上ニ御罰モ顕レズ、殊ニ栄ヘ行クコトヲ見聞キテ、扱ハキリシタンノ拜ミ奉ルデウスハ在マサズヤ、若シ真ニ在マスニ於イテハ、キリシタンヲ守リ玉イ、御身ニ敵対ヒ奉ル者ドモニ御罰ヲ与ヘ玉ハザルコト、不審ヲ起ス人モ有ルベキ也。

この問いには「キリシタンヲセバムル人々、久敷ク命ヲ保ツト雖モ、行儀ヲ改メズ、弥々悪ニ極マルヲ、デウス指シ置キ、玉フコトハ、バライゾノクラ、ソヤノ為ニ撰ビ出シ玉フ人々ニ彼等カ障碍ヲ道チ、端シト而、功力ヲ求メサセ玉ハンガ為也」という答えが記されている。すなわち苛酷な迫害があるのは「キリシタンニモ油断サセ玉フ間敷ガ為ニ、亦ハ比類無キ手柄ヲ顕サセ玉ハン為ニ、障碍ヲ成ス悪玉ドモヲ生キナガラヘサセ玉フ者也」とされるのである。信徒が天国の栄光に至るには、彼らに油断する暇をあたえないように迫害者が必要なのだという逆説的な発想は、キリスト教に特徴的なものであるといえよう。

にもかかわらずフェレイラはロドリゴの「あの人たちは、地上の苦し

みの代りに永遠の喜びをえるでしょう」という言葉を否定し、つぎのように語る。

「お前は彼等より自分が大事なのだろう。少なくとも自分の救いが大切なのだろう。お前が転ぶと言えばあの人たちは穴から引き揚げられる。苦しみから救われる。それなのにお前は転ぼうとはせぬ。お前は彼等のために教会を裏切ることが怖ろしいからだ。このわしのように教会の汚点となるのが怖ろしいからだ。」

フェレイラによれば、ロドリゴが棄教しようとしなのは、布教会に忠誠心を示そうとする自分の名誉のためであるという。フェレイラが「キリストは信徒のために転んだだろう」という言葉を二回繰り返して棄教を勧め、さらに「今まで誰もしなかった一番辛い愛の行為をする」という言葉も二回繰り返して踏絵を踏む決意をうながす。そしてフェレイラによって「教会の聖職者たちはお前を裁くだろう。わしを裁いたようにお前は彼等から追われるだろう。だが教会よりも、布教よりも、もっと大きなものがある」と説得されて、ついにロドリゴは踏絵に足をかけるのであった。ロドリゴはイエズス会から追放され、司祭としてのすべての権利を剥奪され、聖職者たちから「恥ずべき汚点」のように見なされるかもしれないが、ロドリゴは「それが何だというのだ。私の心を裁くのはあの連中たちではなく、主だけなのだ」と思い、「聖職者たちが教会で教えている神と私の主は別なものだと知っている」とする。

後日ロドリゴが井上筑後守と再会すると、井上から江戸小石川小日向にある下屋敷に移り、妻を娶って岡田三右衛門という日本名を名乗ることを命じられる。井上筑後守は「この日本国は、切支丹の教えはむかぬ

国だ。切支丹の教えは決して根をおろさぬ」という「精神風土論」を力説し、ロドリゴが敗れたのは「日本と申す泥沼」のためであったのだというのだが、ロドリゴは「自分の心にある切支丹の教え」と闘ったのだと反論する。夜になってロドリゴの許にキチジローが尋ねて来、告悔の秘蹟を授けてほしいという。ロドリゴはもはや自分には告悔を聴聞する力はないと思われたにもかかわらず、「この国で今でも最後の切支丹司祭」であるという信念にもとづいて、キチジローのために告悔の終わりの祈りを捧げたのは、「聖職者たちはこの冒瀆の行為を烈しく責めるだろうが、自分は彼等を裏切ってもあの人を決して裏切ってはいない」と感じていたからである。だが実はロドリゴは踏絵に足をかけたとき、実は名状しがたい「烈しい悦びと感情」に襲われていた——それは教会を通してではなく、ロドリゴ個人が神の愛に直接触れることができた陶醉の瞬間であったといえよう。そもそも個人の内面に宿る信仰は教会規則や信仰箇条によってその是非が形式的に判断されるべきものであろうか——。

#### 四、「コンヒサン」の「サカラメント」から

##### 「コンチリサン」への系譜

カトリック教会における七つの秘蹟——洗礼・聖体・婚姻・叙階・堅信・告悔・病者の塗油——のうち、告悔の秘蹟は、『どちりなきりしたん』のなかでは「ペニンテンヤ (penitencia)」と呼ばれ、「一つにはコンチリサンとて発端の後悔。二つにはコンヒサンとてことばにてさんげする事。三つにはサシチハサンとてしよさをもてとがをくりする事」という三つのプロセスから構成されるものと説明されている。「コンチリサン (contrição)」とは「人とがをもてテウスを背き奉りたる所を深く悔ひか

なしひ、ふたゝびをかすまじきとかたく思ひさだめ、じぶんをもてコンヒサンをすべきかくごをなす事なり」とされ、「真実の後悔といふは万事にこえて御大切にぞんじ奉るべきデウスをそむき奉りたる所をかなしむにきはまるなり」という。すなわち自分の信仰を告白すべきときに告白しなかったり、否定してみせたりしたことに罪の意識を感じ、それを痛切に後悔するのが「コンチリサン」で、「コンヒサン (confessan)」の「サカラメント (sacramento)」の発端となるものとされる。尾原悟氏によれば、「この『コンチリサン』の思想は、『マルチリヨ (martino)』（殉教）のそれと本質的に同じもので、『マルチリヨ』は肉体的に生命まで捧げるといふ愛のあかしであり、『コンチリサン』は極限的に追いつめられた状況下に生涯を貫く生活態度としてキリストの教えをクルスにおける『ご大切』（愛）として自己自身の中に生かされねばならぬ、これもまた愛のしるしと言えよう」とされる<sup>(13)</sup>。このように考えれば、殉教こそしなかつたけれども、痛悔の念を抱き続けるロドリゴのその後の人生は、殉教者と同じ質を持つもの、すなわち神の愛に忠実に生きようとするものであった。踏絵に足をかけたときにロドリゴが襲われた「烈しい悦びと感情」とは、とりもなおさず神の愛を確信できたときに芽生える神との一体感——それは尾原氏が指摘したような、「苦しみや弱さの故にキリストとの一致をひたむきに生き抜くことそのものが、その人格性のなかにより深いご大切（愛）に導いた」隠れキシリタンの信仰に通じ、「過酷な迫害のなかに二五〇年生きたヒイデス（信仰）とエスペランサ（希望）は、カリダアデ（愛）に根ざしている」といえるもの——であった<sup>(14)</sup>。

一六四四年（寛永二〇）に小西マンショ神父が殉教し、国内には正式に叙階された司祭が一人も存在しなくなった結果、告悔の秘蹟を授ける者がいなくなった。信仰を隠すことによって辛くも生き延びてきた隠れ



キリシタンたちは、告悔の秘蹟においてなされるはずの罪の赦しを自己の完全な痛悔によって代替することによって、自分たちの信仰をまもらざるを得なくなった。川村信三氏によれば、一五九七年から一六〇三年までのヴァリニャーノによる三度目の日本巡察にともなって、「告悔の秘蹟」に関する解釈の変更が示された。一五九一年キリシタン版として印刷された国字本の『どちりなきりしたん』では、トリエント公会議の既定通りに「痛悔（コンチリサン）」と「告悔（コンヒサン）」とが不可分に結びついていたが、一六〇〇年ローマ字本の『どちりなきりしたん』では、それらの間に「時間的な猶予」が加えられている。トリエント公会議の規定のなかに、神との和解は、いずれ告悔をする意向を持つという条件で、真の痛悔のみで成立するという一行が含まれていることから、「司祭が目の前にいなくても、いずれ『告白』をしよう」と覚悟を決めている場合は、『痛悔』が完全に果たされることを条件に、司祭への『告白』は後でもいいと解釈できる。すなわち、一五九〇年代初頭、年に一度、是が非でも司祭に告白をしなければならぬという規定は、九〇年代終わりに、『完全な痛悔（コンチリサン）』のみで『罪のゆるし』（たとえ大罪であっても）は成就するという解釈の余地を加えたことになる」というのである<sup>(15)</sup>。信仰の拠りどころを「コンチリサン」におきながら幕末まで潜伏し続けた隠れキリシタンの系譜を考えれば、『沈黙』は〈神の沈黙〉に加えて、信仰告白の難しい苦境に立たされた〈人間の沈黙〉——殉教にたじろいで言葉を失う近代人の感覚にも通じるものをテーマにしていたといえるのではないか。役人に搜索された「トモギ村」が「うち棄てられた廃墟」と化し、ロドリゴが「部落を包んでいるこの怖ろしい沈黙」を感じざるを得なかったように、小説の至るところで、弾圧と迫害を前にした信徒が沈黙を余儀なくさせられている場面が

描かれているのである。

笠井秋生氏は『沈黙』末尾に付されている「切支丹屋敷役人日記」を、その典拠になった『査訳余録』と対照することによって「ロドリゴとそれに協力するキチジローを中心とする一つの信仰集団が切支丹屋敷内に形成されていた」ことを指摘した<sup>(16)</sup>。絶やすことなく信仰の明かり灯されていたのは外部から隔絶された場所においてであったことは、逆説的ではあるが、さきにロドリゴが長崎の牢舎で「気のゆるみ」ではないかと疑いながらも充実感を覚えたこと、奉行所の独房で過酷な拷問を前に「心のゆとり」を感じていたことに繋がる。イエズス会士としての貴族主義的な矜持を棄て、布教会の名譽をまもるためではなく、神の愛を一身に感じながら痛悔の日々を送ることに、真の信仰の主体が獲得されたのである。高瀬弘一郎氏は、「ローマ帰りの日本人転び伴天連」と呼ばれたトマス・アラキが幕府の禁教政策に加担しながらも「六〇歳前後」になって「最期に立ち上がり信仰のゆえに死んだ、つまり殉教した」ことに触れ、「アラキが立ち上がって殉教したのは、イベリア南蛮国に対する国の外交路線が確定し、南蛮国の宣教師がいなくなった後である」とした<sup>(17)</sup>。アラキは国家の利害にとらわれてそれに加担する宣教師のあり方に疑問を抱いていたのだとされるのだが、ロドリゴも布教会からの評価を思い切ることを通じて新たな信仰にたどり着いたと思われる。組織と個人との関係、そして教会の組織よりも個人の内面に真実をおくという価値観は「現代日本人の発想法」（山本博文氏）といえるものであるかもしれない<sup>(18)</sup>。

さらに『沈黙』に特徴的なのは、ロドリゴが書簡に繰り返し記したようにな——「日本の百姓たちは私を通して何に飢えていたのか。牛馬のように働かされ牛馬のように死んでいかねばならぬ、この連中ははじめて

その足枷を棄てるひとすじの路を我々の教えに見つけたのです」「領主は領民たちにすべての権利をもっており、それは基督教国の国王が所有しているものよりはるかに強力です。年貢の取立ては甚だきびしく思ったものには容赦のない刑罰が加えられます。島原の内乱も、この年貢の取立ての苦痛に耐えかねた百姓たちが領主に反抗したものです」など——キリスト教が日本社会に「階級闘争の覚醒」をもたらしたとする視点である。マルクス主義以前に、階級闘争を見いだすような考え方が本当に存在したのか、あるいは戦後社会に生きる遠藤の眼で過去の殉教史をとらえているからこそそのようなみえたのか、など議論すべきことは多々残されていると思われるが、遠藤はきわめて近代的な歴史社会観を持っていただけは明らかである。遠藤は信仰に「父性的な義なる神」としてではなく、苦しむ者と共に苦しむ母性的な愛なる神（山根道公氏）を見出し、いたのにはちがいないが<sup>(9)</sup>、信仰を告白して殉教することを決断せずとも信仰を言葉に表さないことを痛悔すればそれが赦されるという「コンチリサン」の系譜のなかにこの作品をおいて考えてみると、過去の殉教史を描くなかで、実は人間中心の近代的な信仰が示されていたのではないか。聖人伝の教えに従ってみずから進んで殉教しようとするのではなく、殉教にたじろいで言葉を失うことから近代人の信仰がはじまっているのではないだろうか——。

## 注

『「コンチリさんのりやく」と『マルチリヨノ勸メ』は『きりしたんの殉教と潜伏』（二〇〇六年二月、教文館）から、『どちなきりしたん』は岩波文庫版から引用した。

- (1) 浅見雅一『キリシタン時代の偶像崇拜』（二〇〇九年三月、東京大学出版会、二五五頁）
- (2) 同右書、二六七頁
- (3) 同右書、二四一～二四三頁
- (4) 高瀬弘一郎『キリシタン時代の研究』（一九七七年九月、岩波書店、九一頁）
- (5) 高瀬弘一郎『キリシタンの世紀 ザビエル渡日から「鎖国」まで』（一九九三年六月、岩波書店、五五頁）
- (6) 尾原悟氏によれば、禁教と迫害を強いられたという「弱者への共感から、たまたまその場にいあわせただけにえらい災難に遭い、その他大勢庶民は泣きながら死んでいった犠牲者とだけはいきれない」。なぜなら彼らには「キリスト教の根本的な態度、愛そのものである神への、余すところのない人間の真と愛のあかし、すなわち、全存在・生命をも捧げるという理想が息吹いていた。二五〇年を超える徹底的弾圧の長さと同万人とも推定される殉教者の数は、一時的な熱狂や狂信状態とだけはいえない」からとされる〔解題・解説〕『きりしたんの殉教と潜伏』、二〇〇六年二月、教文館、二八三頁）
- (7) 同右書、二八三頁
- (8) 同右
- (9) 前掲（1）、八頁
- (10) 前掲（4）、六六頁
- (11) 前掲（6）、二八五頁
- (12) 前掲（1）、二六八・二七七頁
- (13) 前掲（6）、二八八頁
- (14) 同右書、二八九頁
- (15) 川村信三「コンヒサン」を留保する「コンチリサン」（太田淑子編『日本キリスト教との邂逅——二つの時代に見る受容と葛藤』、二〇〇四年三月、オリエンツ宗教研究所、三五～三八頁）。前川登氏によれば「遠藤氏の意図は、踏絵を踏んだ司祭やキリシタンたちの精神的な大きな苦悩を察して、殉

教者たちの英雄的な姿から、気の毒な隠れキリシタンたちのほうに人々の眼を向けさせることにあった」という（『キリシタン迫害、殉教踏絵』、「カトリック文化」第六号、二〇〇九年七月、二三頁）。

(16) 笠井秋生『遠藤周作論』（一九八七年十一月、双文社出版、一五四頁）。

他方、「不食」をキリスト教における「断食」と解釈した池田純溢氏の説（『遠藤周作『沈黙』の研究——『切支丹屋敷役人日記』・〈虚〉と〈実〉との間——』、「上智大学国文学論集」第二六号、一九九三年一月）を踏まえて、荒瀬康成氏は「『沈黙』という作品に即して考えた場合、キリスト教の教義を完全に棄てたことを意味する〈自殺〉よりも、『キリスト自ら模範を垂れた』行為そのものである〈断食〉の実践によって『神の愛』を求めたと考えた方が、はるかに蓋然性があるように思われる」とする（『遠藤周作『沈黙』におけるロドリゴの最期の信仰——『切支丹屋敷役人日記』に描かれた作者の文学的意図——』、「阪神近代文学研究」第三号、二〇〇〇年七月、七五頁）。

(17) 前掲（5）、六五〜六六頁。また下野孝文氏は「背教伴天連となった時、彼（フェレイラ）の眼前には、目明しとして既に三十年近くを務めるトマス荒木がいた。トマス荒木は、時にフェレイラとともにあり、その姿は目明しとなったフェレイラ自身の姿でもあった」と指摘している（『フェレイラ、そして沢野忠庵——『沈黙』論の前提として（一）』、「語文研究」第九四号、二〇〇二年一月、三三頁）。フーベルト・チースリック氏は、ヨーロッパに遺された資料にもとづいて「フェレイラがほんとうに殉教者として死んだのか、あるいは少なくとも死ぬまえに背教を撤回したか」という可能性に触れている（『クリストヴァン・フェレイラの研究』、「キリシタン研究」第二六輯、一九八六年七月、一五三頁）。

(18) 山本博文『殉教 日本人は何を信仰したか』（二〇〇九年一月、光文社新書、四二頁）。

(19) 山根道公『遠藤周作 その人生と「沈黙」の真実』（二〇〇五年三月、朝文社、三七六頁）、片山はるひ氏は「こんちりさんのりやく」に触れながら「二五〇年間の過酷な迫害の時代、最も大きな罪と考えられていた『絵踏み』をしながらか、転びつつまた立ち上がる力と信仰を潜伏キリシタン達が持ち続

けてきたのは、まさにこの「こんちりさんのりやく」の存在によるといっても過言ではない」とする。そして「こうして受け継がれてきた信仰が、決して単なる殉教逃れの卑怯者や弱虫のそれではなかったことは、一八六五年の信徒再発見の後、『浦上四番崩れ』等で知られる大迫害と壮絶な殉教の史実が如実に示す通りである」と指摘している（『遠藤周作の文学における『母なるもの』再考——「かくれキリシタン」とフランスカトリシズムの霊性——』、「遠藤周作研究」第四号、二〇一一年九月）。

※拙稿「キリスト教と昭和文学——遠藤周作『沈黙』を民衆史の視点から読む」（『昭和文学研究』第六四集、二〇一二年三月）を、ご覧下さい。